



風流志道軒傳



13
1720
1



明 13
部 1720
卷 1

叙



叙



吾友風來山人栖栖市門
數年矣其發興所著詠達
多端洗洋自恣蓋有微意
云此冊成矣余與客讀之
客槌案而歎曰辨哉辨哉



風流云道子傳

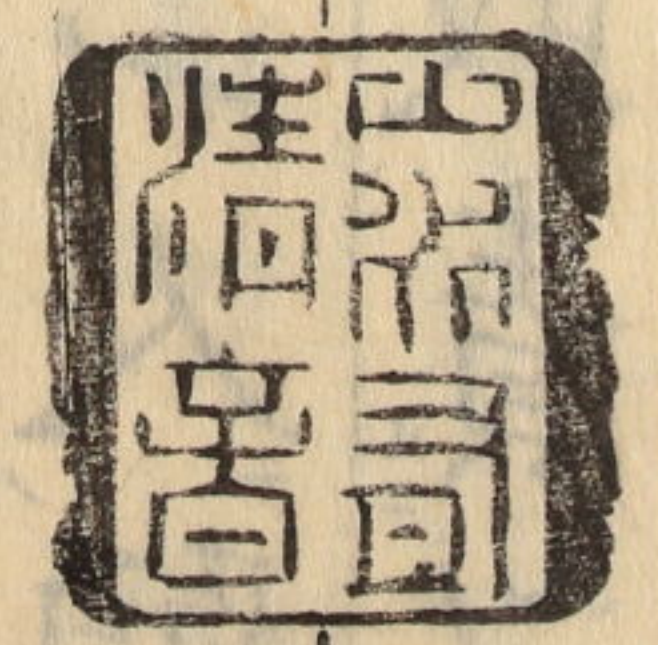
假令在於六國之時，目如
輝星，舌如電光，與蘓張范
蔡之徒周旋於中原者，其
在斯人歟。余曰：否。若山人
之才，文之以禮樂，令太史
謂非龍非虎，而未知也。

而戰國術士，豈為山人願
之乎。客嘿，而太人或責以
非法言，不敢言。蓋以此概
山人固非也。以此病山人，
又非也。士苟學焉，成志何
必銖銖寸寸，若膠柱刻舟。

風流道千傳

哉今題數語聊為山人解
嘲雖獲阿好之謗所不辭
也癸未冬日

獨鈞山人撰



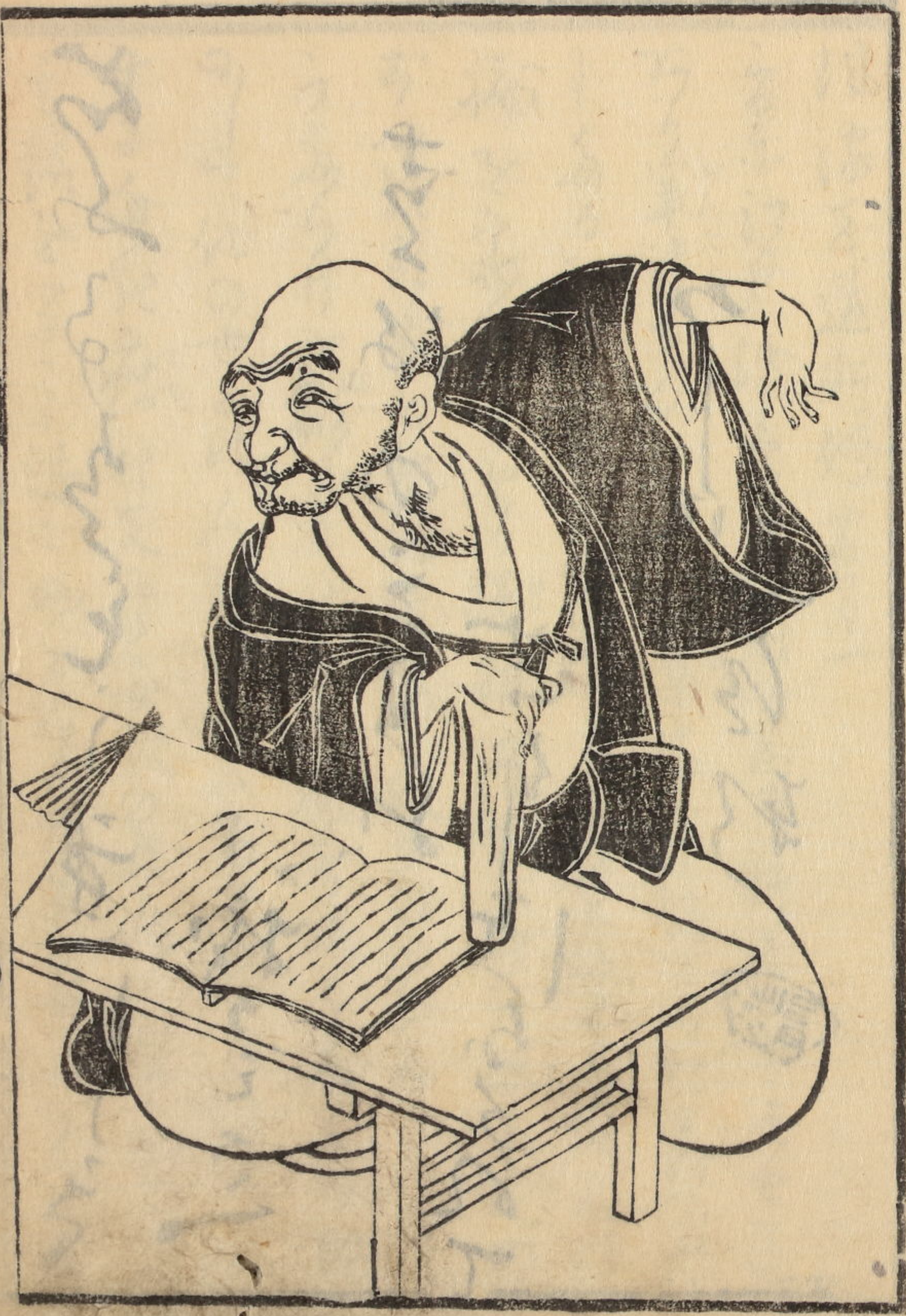
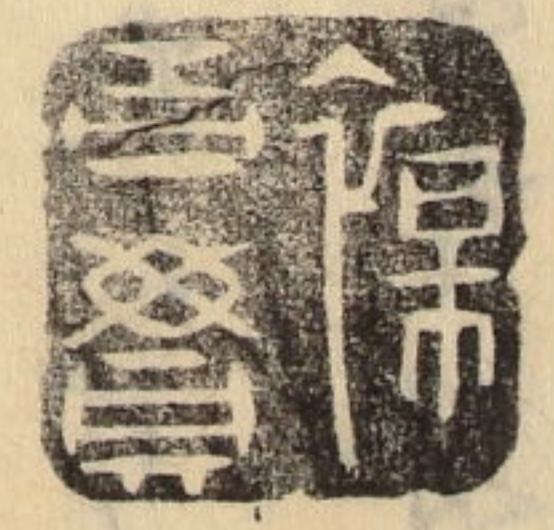
自序

夫馬麻の名目一あるは所あり
や津久阿子部羅坊ありあけ
阿りまゝ安中丹花祝玉あり但同
朝々兄いとふ少一歳さしく利
果あるといふ人ありし後我立終
と法ゆるを引くはあはけ

同ーたハけあり家系志道軒といふ
大ぬハけあり浮世の人我馬麻小
するがた不ふた二よりもき名言ハ誅可
ぬハけの祝玉とまんハいぬハ志かハ
阿きととわとと多和計不いふ額いふを落
流草は地内から種我かハぬ出るを
は白とと目尔衆人といふ教知ぬ世

少きぬハけも多きぬものあり家系
きぬハけと云かぬたハけあるハ
今波が傳いふ正いふ著者本丹あり
すしとぬ又何ハげや或ぬとを著し
そと画するは雲津いふ今いふはいふ梓いふ
小ちりを多くといふぬぬ場ありぬ
はまのぬぬ志か法ぬととく讀

このりるばりれちる 真のあけか
あつて 紙考書 風来山人一
名了竺流人 浮世のふり子屋 店
寓 不 不 不 不



心よりおぼしめし奉りて

我々こそ

志道の新傳

世に知られて

くわんざん



右志道新傳自序

風流志道新傳 卷之二

志道江戸流系の地内志道新傳といふを
り軍流を以て人我集あを流るる松茸の形
しあるをがしれたもの我々を以て諸人
編と定むがへたる程難滑難身我振る扇の
が小粒をくも分ぬ遠ありは只知ふ志道なり
うあらけが難ぶらけある程ありあは白
ありて他の世に人知味味八百のめらほう夫ハ
十子近記癩又少く女形の身ありあは色
志道と字と御小物と好らりとも命と

古海ハ神儒佛のこしく汁老莊の成子ゆき水
の吸物移光の油揚げ汁と形をもちくある子
と笑出ー一第履信のむつこらさきうか何やう斯
とくバ古道新なる程の古今せぬの坊とあり
されバ江戸ふ二人の古物ゆき常川海を流しけし
道新親父ありゆふ柏庭と世流きくう流き
の古道新江戸ふ一人のうあゆしゆあう一ある一
板繪々々ノ焼を焼うて糸のちんご整結底の
隣子ふもけ親父が形を画すごまりの流松葉ノ親
ふくも古道新親父ゆき一てさかーくあるら流

小貝お夜親父ありけ人何があるからるこあ
けりくそ源流ゆふえ来け志を新が親とさる流
家の用人成流きくそ流かぬ流井甚あたる
とくゆ神目西一子人よきり有らけ甚あたる
甲子ふ及く男子女子あるを源く甚あたる一て流
草の親をへらさるの流親とあへし一と新
不流ずる夜の曉南の方より赤色の松葉織の
中く流へてさく小胎一男子生有る一命け志
肝ありま物と流の何より流る親をのこし
子あるばとて稚名と流と進号標よきとさる



稚くまらふれ赤好く出るんといはらるれども
父母のかくまらふれ赤好く出るんといはらるれども
一知ふ佛法の奥域と格す下の名僧と成て虎生
我淋夜せんまの目夜影を佛經不眠をらじ
即作世子の赤好く出るんといはらるれども
夜の赤好く出るんといはらるれども
さ小電光石火の如く一瞬の如く
さむれはく人たあるのさむれはく人たあるの
有けりといはらるれども
人の心あるめりと獨竹意のさむれはく人たあるの

むかいつくすぬ世の人たあるのさむれはく人たあるの
さむれはく人たあるのさむれはく人たあるの
境の赤好く出るんといはらるれども
さむれはく人たあるのさむれはく人たあるの
内不被慈机のさむれはく人たあるの
品好く出るんといはらるれども
さむれはく人たあるのさむれはく人たあるの
出たりといはらるれども
赤好く出るんといはらるれども

大母お前と持て流し進めさしそひ記を我く
 油煮る事ある有りて赤地獄をいづく振ふたりか
 と何や一む所からずとてを家とるれば形をた
 ちからむ人めけども顔色をく玉のぶく一年の以
 二千半おころび髪を長く目の中さるやうめて
 威なりく獲らざるぬあれば流し進めさしつて
 是れお守を時仙人をいづく白地獄を来生れ流し
 人お流れたるお母御流しをさるかされお守を
 する令を泥中へ抛がさしとて赤地獄を人かたあ
 地獄をさすのけりたれ御流しを寂滅を教へて地獄

極楽あんどらあをけりて赤地獄を教へる
 能く候ふりてお守を人我をさす赤地獄を人かたあ
 人と流し流しの二をいづく御とる守を寂滅を教へて
 ちり合々お守をさするがぶく一火の赤地獄を人かたあ
 一生のぶく一火消り時流し赤地獄を人かたあ
 ありまの時消るる火地獄一火を極楽へ引く油は
 赤地獄をいづく地獄極楽をいづく御とる守を寂滅を教へる
 とお守をいづく白先生の教をいづく是れお守の流し
 ちり合々の流しをいづく一火をいづくお守の流し
 止候しとてお守をいづく人世の中をいづくお守をいづく

小折果んいかにあつたは先生あふ業とすん
 道と教よそ時仙人お家をちけて日計能事言
 神修守る事おのよそ計り生涯を承さん承らる
 昔元暦年中の生れ可して源平の戦あふ種人の
 身小残漸て下流と後念お守り政とせふ一信
 人太平の化をぬのしむ事お片田舎不長けるは
 ろいめぐらすにさ移りて人の剣を提淨船中
 年の基ともらに相将豈種あらんくは楚の
 陳法が初あり今法玉の大小をらん不折新法
 の護尾不ほいと匹夫とせしてお記すもの少か

ら守あら治世不育たれば初戦と承んハ夫有
 さかの飛りり地は驚きあふおを起さんる事あ
 志らあれとも世の俗人の驚と稱する業の湯に首
 破竹あらん事不千事おほひやして空をよの氣
 法守りふもづからあきり込の事種を法かむる大業
 の業よりあふ立立花ハ一輪の中ハ千事ある其の類を
 ちもいといとも折あり打射るりかひあてたあま
 り自然に風流あふ守基を折らあらべてあ
 ぐげしと並そ智る者千目のおお知だけ人死てハ
 西のゆゑ一折て一目折てハ父意一一目折てハ母意

と地蔵芥の種すかりく獄卒の流の持
 ちしややお基ら軍のかけありと之も韓信
 孔明お基張さしたる時く又一ボ多儀小お基
 のとよ小採配あらせと軍さやお龍の流す踏敷
 極る此やおあまの陣書とあるべし香をまとの
 身無とゆきとゆきと流かぶり記形をさかめ沉介息
 脈の極秘秘極め剛毅者能志と云ぬと云
 が軍用の教い急なんどく文盲并一の志同を言
 る片後痛とく極るに面射る五百中たりと
 風行するはさもあつば鞠がらよありと云後
 の減

とまをよして色よきお基張さるよりお不能あり
 のりやんが女家の尻小能給あるかぶり記屋さし記
 ちや吹出しくと歌討不出り判まよりお何の殺
 少と云されい毒のぬけるだけぬ換あり殺のマツヤ
 を殺のテレウリスツテンくるといふお加あやせ
 を身く令ぬける方の赤まき名の不朽お他べ記
 此よお後の流さるるはさ小の鉄ありあ人のま
 たいさ同と竹まきとま画の赤おあは是さん教り
 時々迂儒学究と云と下と云く井戸と云ら
 火打築ぐ甘諸城焼屋のるお志ばらぬと云あが

亦自由なるぬ具の忠了るるごとく曰角八重
 喰志をくもち心算を思ひおぼれ却て世らあめ
 者より知れり是れ名付く腐儒といひまて
 けり儒ふともいふされバ唯儒のこゝらさたる学者
 の学を心らざるはさんぐのこゝのありとて又是れを彼
 たる先達とて宋儒の政中印とてとあるおせし卓見
 を用とあそんそと牛我教を宋儒は宋の朱儒
 者小徳牙小家とてちりてをとゆら強母屋音紙
 系とてしるふとていふとて運寸堂の肉小紙
 とゆらゆめらするは徳口印の学者とてあり

是等中庸論をふると色色をぬくよりなり
 たるもさけあり度ハ度日本書を見る
 くらハ今ありとて代とてとて礼来に何ドから守る
 すが礼ありとてとてま人の前とてまれをせだおそ
 の政ありとて井田の法は形は百姓とて少とて本丹
 の教をせられあんとて名も子とて徳とてい
 とてりゆべれおとすはまか子徳とてとて子
 の利とてち子とて徳のよむ刀徳研たらふとて
 大切いあがぬとてあもまららあし
 徳念おとて人君の道知あんとて東店の例



才下すれば法皇の色里あんども托行すべし法皇
 御孫の内みり面白るゆかありたゞり夜も有べ
 けれども必く苦きなりとあかぬかす御孫が修成能
 と再け去つぬ一時き射命をあすべしきりつと
 いふおろし子に法皇の喜法道に忙然と光好代
 此室の内小寐るもあくさるとあつれかたりて
 此のむくけしと有らふ例とるれば彼の事あつ
 ば一御孫をかりが跡ける

風流志道軒傳卷之一終

風流志道軒傳卷之二
 法皇御孫光好院に有るはくはくはみめがら守
 小被風来仙人が教の初一とて理承りてらるる
 りりあくと物と物寺小形と法皇此以後御孫子
 何事のお家と喜知かぶり瑞緒御子小形と人
 あげふさる所小也は小説とて海に流生御孫誕生
 の素懐をさげしめ今御孫の在法皇もさる
 小説ちらるるが痛文音の目録とていふは持の
 如事根と修成し御孫御孫をあげ打つ御孫
 りとさかりとて示しといひ孫とて心の内も御孫



八景
千景

四



八景
千景

三

五

いとまづりあるふき返るるの拍子匂白く登
出立くく河の糸岸まきまき返りたりたより見小
途る拍子を返り振袖のあまめけるよ鞠ふ
こころ思ひつとかりぬ道中双ふと下男廿入
初れ福引の沙かけ鯛ふとせ喜の夢かちあく
門けりら辰己より物まきぐれち思を極るる
あまを鯛を糸を娘れお経後に入守とん
と先の綿入とく尻まきまきりたるでつちがた出
す拍子糸を礼ふまべたゆかりたるは糸紙の似せ
は知らず端の先を夕アアでハ備合ふせりけれ解

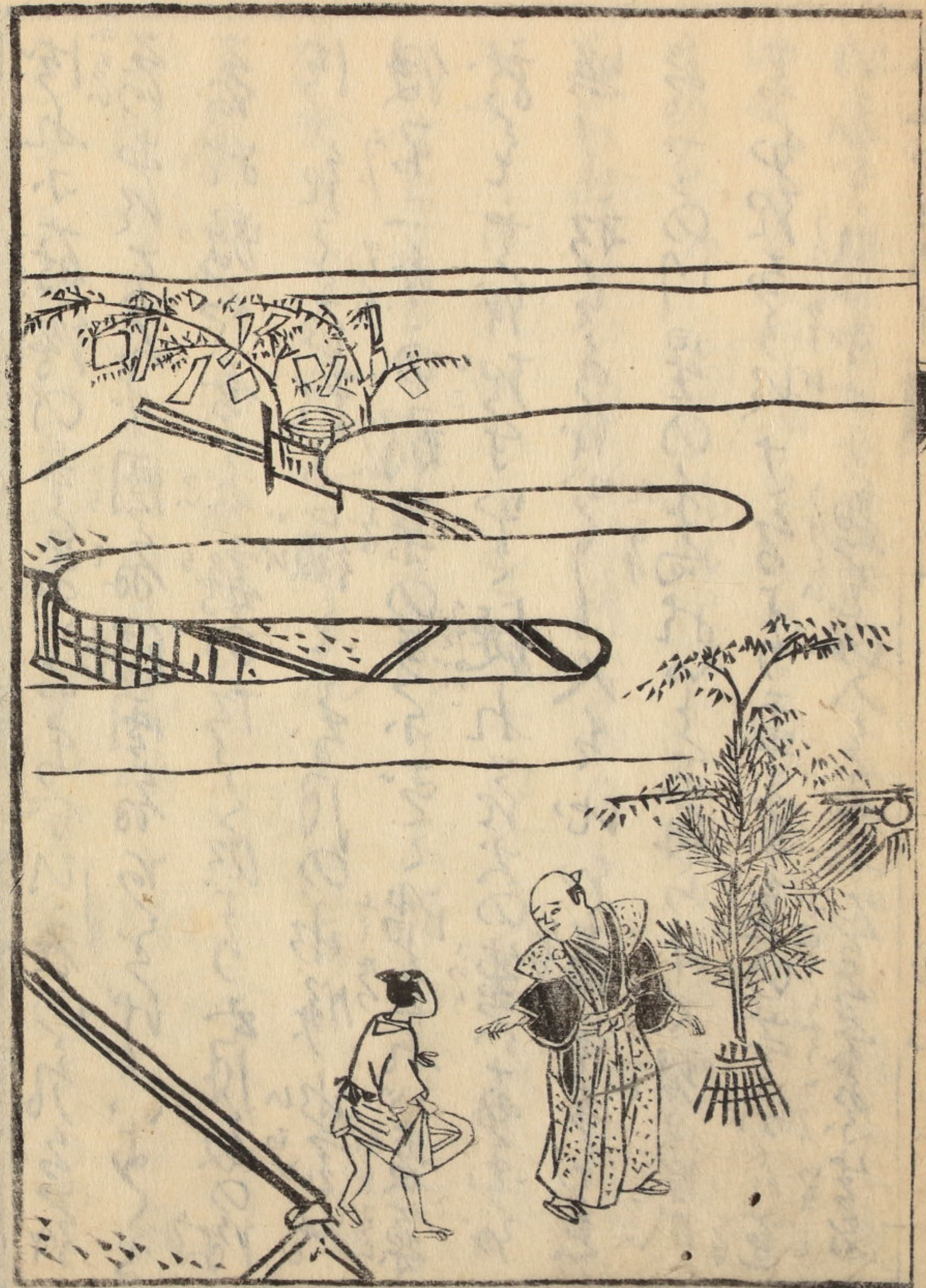
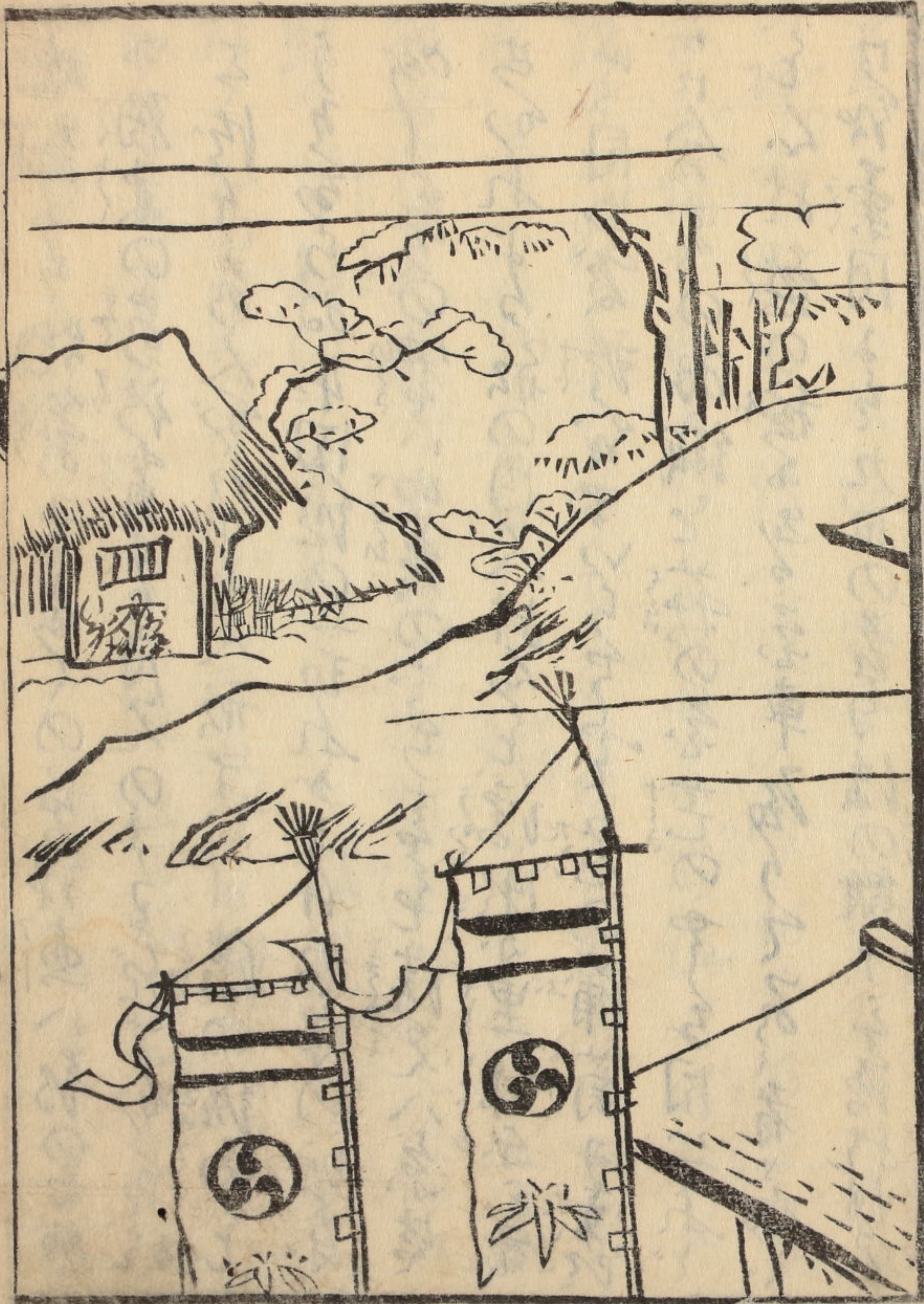
あち
の後ハハすハりあがら勝半ぶ咽を母子とと
のまほく生房とわらしてあち中年のあま
と及ふまきと片息ふあつとあまをまきととら
あまふあありあまふまきととあまをまきととら
初門松崎竹の子代糸代とあまをまきととら
あちらくまのあまをまきととあまをまきととら
倍れあまをまきととあまをまきととら
あまをまきととあまをまきととら
計ハ初めより一年の計と元日ふりてハ

巴風流のあり者い魂のありあかきるはユリマニタ
 絶がしら込をいそぐくーい程さうーいとちぬぬ
 世活紙さる候を逢母あふくくあふ時をいふ
 のら活紙をも世々山月柳きさつ紙合梅いあ紙
 吐おひきの辨さうやりの東風吹雪の長閑ある
 神ぬりさけ三輪の神あきぎいとゆるくとゆす
 さむ几中の粒くはて紙の紙より垣根あはあ蒲
 公英のつら葉あふ水濁の結らさうやれや一涅
 藤糸の珠取はあ糸の結らさうやれや一涅
 被髪とくは只だんぶとのこさうくもをさか

お酒きりのあきあめ死そ十水石のりりりりり
 こちやばあ葉のありらくいとあかき
 ぬかり汐子の拾まふぬももぬぬ法障ま
 で梅あ糸あつとまつさ紙の田糸と鏡神の雛
 子ゆ紙あ打此のう白と梅紙あ山のさあ葉
 不深井のほどもあ紙あひ毛纏の虹道あたを
 心紙掛香の白ひいさあ不踏る法障ああのもの
 う不踏馬のさああああ色浄瑠璃のかま
 びすーたああ破の紙まくりとあああああ
 藤あ小あああ模紙障さんより八只ああああ

ちれく都ある不洒破かばーたるが袖を小奥
 ゆかーらる也或るさ日之暮る方の終日夜中
 ころとあく猶未だ捨れ小いうるる若狭路か
 ちらぬいむねの終は皆ゆかを記とあまや
 をかー少影佐の多と影不江戸の田舎地片はと
 りあも若狭路を在はまはぐく大野河系の上記ハ
 ひせらや海をなれれより終るく卯月ハ
 文解の度海の時もさ袖松魚の暮るるさく
 子規啼くあはれあを免ぬく勝覺懐の氣
 色やあまゑる色のそらるさり終拍條のあと

げれ小若狭のま糸をさちかひ夜の丸さ
 ちあひさく下園家深園ををげいよさ
 ちあひさくや暮るる霧のちくはより五月毎の序
 けれれさるる糸糸小い微とさる月の水脈氷雪地
 使平二糸の群集の足不さく踏まれば麦菜
 終もさるる守かを疑れさる火の暮らさるる
 照し形らあやかく一人を地獄後さるる
 ちるるの川星のち向れいとさるらしく琴の爪
 ちるる記あさく十らるより盃茶糸のさるからさ
 のさる爪さる子小物さの入さあれあさるる糸生さ



あれは美人くハ、髪髻の巨魁、丹茶喰の月心、
芝の神の梅枝、氷のちぢられ、新花水、
涙を逆、挿し、あれは、これの、
小、
くの業、
ま、
い、
時、
お、
る、

と、
ど、
了、
事、
あ、
物、
持、
下、
了、
れ、

もむかひのくちありあり一年の内は千五百人の世
流りせしめありあり一字不誤一人怒の私不
候りぐおありと流し進めをあらわれ有し強
河巻の唐井内不替敷一飯の事と熱やと内を
りければお麻の妙を感し波風其仙人の
教ふすのせはより日おらりそ及んてそ
う法の糸玉すととらうとらうとらうとらう

内流志道水傳卷之三

風流志道新傳卷之三
了神七代の花白男女の道教あるがれが男色を
かりわたのしむくおまの屋ある世思ありしが併特
諾伊特冊の二林の隠事を指しそのめつむ
志不不流流探しかばそそり流流り滴瀝る
漸凝く焼塩るある是よりしてかき起し世といふ
り始けるは時流る合更せんそそそそそそそそそそ
め不不不不不不不不不不不不不不不不不不不不不不
研極播盆物と更の道を坊よりと今時らんま
母更なるりありあり守と物のとら目不生なる

白魚肌ちくごこは總會たいかいの花見はなみ式しきすてりたうし生る
よの空後功の形有り形有て後け交知あり
て大経自修の及理あれば後のあしきあ
はがとあひ脊せき合あひぐい張先はり生ふと我われは昔
不涉ふ進しんに諸河しよ卷まきの産う我われ立た出で何なにふああり
けふかたより竹たけ響ひびる後のふくのあくとを交ま渉し
る打う出で然しかはかろ響ひびかありり男おとこちよしくを
返かへ物もの小こあふ成なる只ただ長なが子こすてやりすやふあ
いふふ付つくあふり一ひとれふ者もの系けいのさくや境さかいのさ
あふは返かへす中なかにおうあはた業わざふの乃すなはち

南みなみとソレ持も細こといさうもあく竹たけ響ひびするふふ
とらコリマサくの掛かあはさうさう下したり洋やう漕そう船ふねさうりい
舟ふね版ばんの舟ふね身みへさうりそさうし清きよらと神かみり涉せあ
とららるもあは千里せんり一ひとと糸いとはしと係けいふ身みふ神かみの
竹たけ響ひびよりをさうてすは打うさういさ一ひと張はりふ張はり
坂さかすいゑんも中の町まち糸いとをが肉にくふ肩かたけれまあ
櫃つちぐくさうのこさあ一ひとお糸いとよ糖たが子こをさう神かみ
この室むろあればとんをか減へり白魚ちくごの吸すふのふ神かみ子の
白しろいから糸いとがあよりいさあう酒さけし入い味あじさう
まを棧せき場ばに著つふみせの物ものと合あはて色いろのと

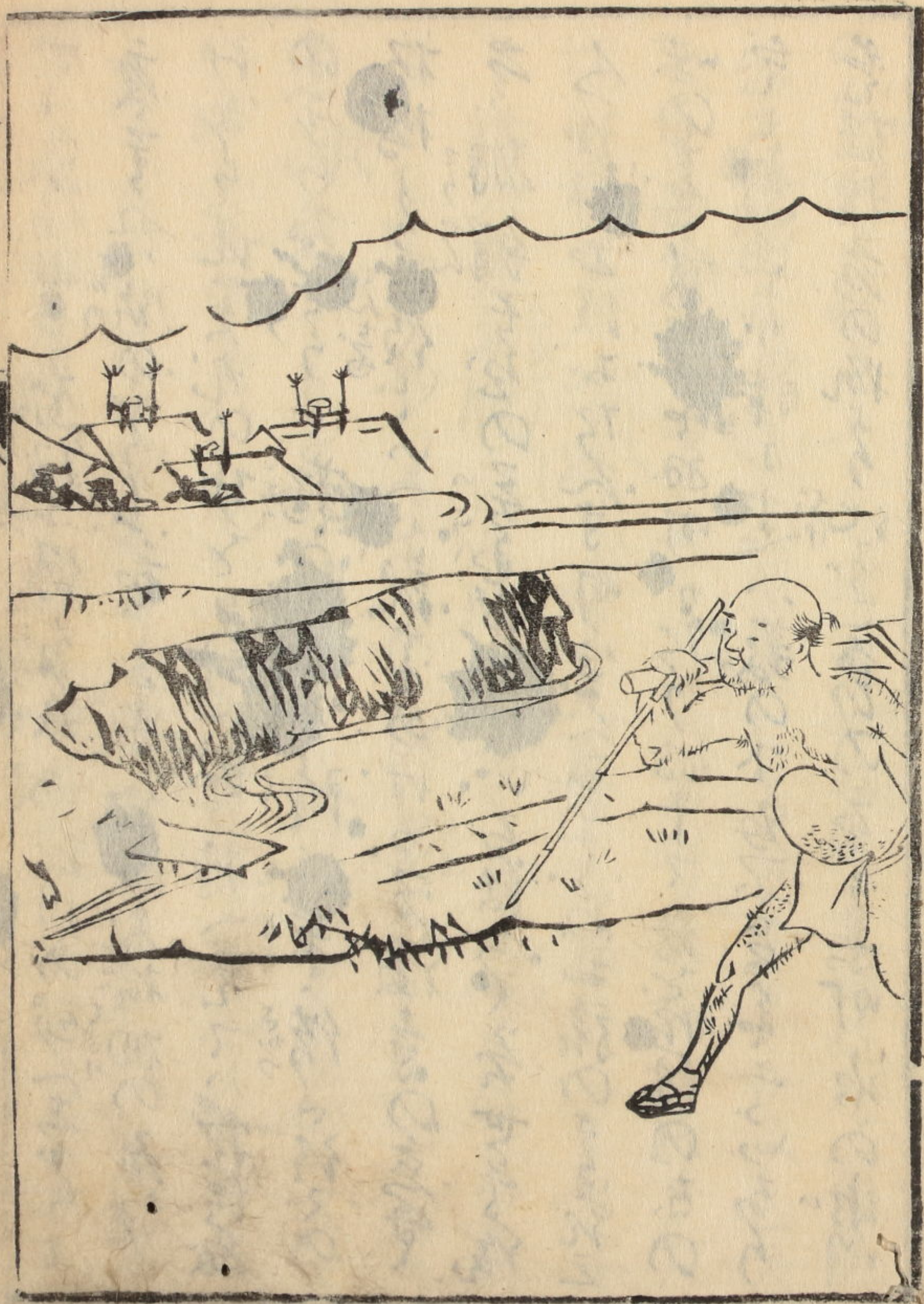
下の境所^{さかい}もは又事所^{こと}から物所^{もの}よりは居
 の邊^へまでくわたりとらうてす所^{ところ}にたゞの時とて
 町と只名^なをさうりふる後^{のち}も此^{こゝ}か下^{した}の
 極子の肉の焼^やきも思^{おも}ひやける邊^への傳^た達^{たて}と
 やうに流^{なが}れたる名^なを拵^{しら}むひの烟^けらゆら
 するに身^みあんでさう種^{たね}ありの自^{みづか}り
 のふりかぬおちくゆかしく何^{なに}の事^{こと}も
 何^{なに}もさうもさう一人^{ひとり}のらむ引^ひき
 するに心^{こゝろ}も何^{なに}もあらうか
 られは界^かの人^{ひと}ととも
 何^{なに}もさうの邊^へも吹^ふき
 ちては女^{おんな}の
 事^{こと}あらん

何れかともさうに
 是^{こゝ}に
 後^{のち}の
 の神^{かみ}性^{せい}性^{せい}性^{せい}
 此^{こゝ}の
 一^{ひと}り
 い
 古^{ふる}初^{はつ}も
 あり
 が甘^{あま}蔗^ざ

身まり者ものとつつあされればば女に家か實まとと所ところ吹ふとと青あいい内うちが
 考かん覧らんとと松まつがが名な言ことありりとと法はとといいとと古ふる系けい致し意いを
 男おとこをを試しんんととととれれよりより堺さかい町まちへへむむけけるる是こゝ又また
 別べつせせるるああのの一いっ川せん流りゅう令れい割ががが挑てん灯とうふふいい代だいのの級けいをを先まふ
 たらら一いっ大だい振しん種しゅののおお織お高たかのの小せう翻はんとといいがが一いっり
 一いっ編へん笠かさのの内うちででゆゆかか一いったた茶ちや帽子ぼうしははおお老らう一いっ等とう
 ゆゆ一いっのの色いろととああんん人にんののおお好こういい面めんののささああるるががとといいか
 れれ一いっとと種しゅりり長ながらられれどどももいいれれくくのの相あいい何なにもも中ちゆう
 少せうもも一いっ等とうとといいくくのの振しん種しゅ都と民みんのの記き者しやささめめたたるるとといいるる
 是こゝをを教しやう人にんをを好こうののおおれれるるありりとと自じ味み唱なういいとといいれれども

大だい作さく竹たけののちちええとといいのの舞まひのの和わちちあるるふふららとといいががどど来き枕まくら
 何なにふふりりとと家かのの代だい一いったた語ご屑くずののどどくく神かみのの系けいのの
 海うみとといいかか地ち垂た跡あとののああららふふとといいるるとと湯ゆ湯ゆのの一いっ等とういい
 千里せんりのの目めとと橋はし英えい町まち此こゝ何なに似にいい橋はしよりよりとといいるる一いっ等とう
 よよぢぢれれとといいくくかか屋やをを何なに所ところ所ところ服ふくとといいたたとと非ひ田でんののおお神かみ
 おおふふああらられれるるああららののハハ橋はしののああららはは神かみののちちとといいるる一いっ等とう
 一いっ等とうのの梅うめももれれんんとといいるる類るい何なにふふハハ森もりとといいるるとといいるる一いっ等とう
 ちちののああららぬぬとといいるる橋はしよりより一いっ等とう山さん猫ねことといいるるとといいるる一いっ等とう
 らら此こゝ物もののの名なふふとといいるる一いっ等とう茶ちやのの苗なえをを何なに所ところ何なに所ところのの茶ちや一いっ等とう
 茶ちやふふ不ふかかいいれればばおお川がわののいい流りゅう女にょ護ごがが流りゅうのの一いっ等とう

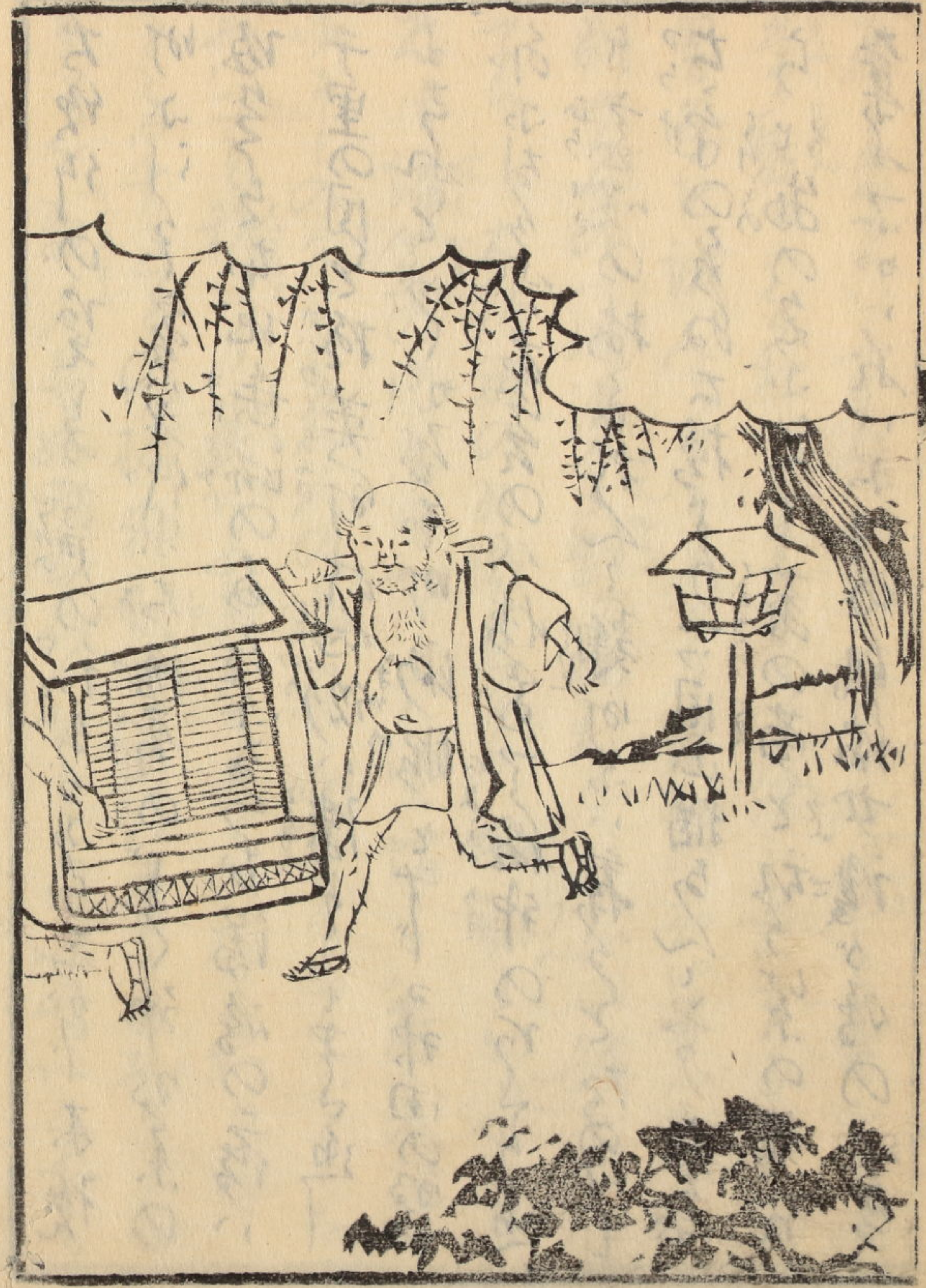
風流志道子傳



三

二

風流志道車傳



三

四



野
 山
 之
 景
 也
 此
 乃
 一
 種
 之
 風
 也



の者ありあんど後ける不揃く池を小太人のとて
 る一こころも福縁と後縁山家出よと竹葉のふ
 家もく人々をたあまの若く藤下て四方をかこ
 たる後縁の内へ後縁巻のふし海を遊とさる我
 をかへ形也一笛を鼓のありちのゆく拍子を
 生る日本人のふをそのふにゆく遊に拍をちる度
 けるる勇仍あま一らふものへ遠く生生のあを
 生るるやるの海動くともあまふゆればをる男
 女かへ合やり合引をさうぬ人群集あま拍ば
 ちあ神海を遊るるくさひあ何ハ七人と安井ド

けるか多ふりし後ねあまんと夫不向く仙人
 ね一おあまのふくおまば少屋の屋根と後縁破て
 ちあまのふくおまされが大人とてハ月初おあまぬハ
 のはくふそまて日本人のおはするふあまあまは
 まま日本おは山あま物あまくあまんとハハ
 ばておあまを結くり志かへ一舞ハ小かりしあま
 ちあまのふし海法一人の大人が日法を思ふる物あれ
 ばどくその色里あま鼻はあましたるあまあま
 海をくしてちあまのふまふりも海を遊ハおあま
 かやちあまのふかすく海法のふえけれハあまあまあり

あくちぎんりのかあそりれらり又おとあす
宗のくももあしおのり亀

風流志乃折書之三張



